

[Teachers' cafe] オピニオン レポート

五十嵐 一浩 (新潟県・中学校)

1 チーム名 「チーム 学び」

2 身に付けさせたい力とその定義

① 身に付けさせたい力は「学びの基礎基本」

人間は誕生してから死ぬまで、学び続けることに価値を見いだす生命体である。パスカルの「人間は考える葦である」デカルトの「我思う、故に我あり」を引用するまでもなく、学びの重要性を否定する者はいない。しかし、良質な学びは指導されてこそ得られるものであり、学びの基礎基本を身に付けさせることは学校教育の使命である。そこで私たちは身に付けさせたい力を上述のように設定した。

② 定義は「主体的に学び続ける力」と「学習習慣」

人間が学ぼうとする時の基礎基本は、学びたいという強い欲求と確固たる姿勢である。すなわち内発的な作用と外発的な作用が融合することこそ「学びの基礎基本」と考えた。

3 学びの基礎基本を育む具体的方策とその条件

主体的に学び続ける力や学習習慣の定着は、一朝一夕で育てられものではない。系統的で計画的な指導体系を作り上げ、発達段階に応じた適切な指導が求められる。その観点で現行の6・3・3制が設計され、少なくとも高度経済成長までは有効に機能してきた。つまり小・中・高がそれぞれの子どもに応じて学びの基礎基本を適切に指導してきた。しかし、子どもの心身の発達が早まったこと、各校種独自の課題が生じたこと等が要因となり、小・中・高が前後の校種との脈絡がないまま指導形態を変化させていった。それが「中1ギャップ」「小1プロブレム」を生み、12カ年の学びの系統性や連続性を歪めてしまったと考えられる。

そこで新たな小・中・高の連携を構築し、学びの基礎基本を徹底して育成するために、次のような具体的な方策を提案する。

① 中学校区を1つの単位として、幼保・小・中・高の教職員同士が交流するだけでなく、園児、児童、生徒も密接に交流し相互理解を深める。

② 中学校区の保護者や地域の方と交流する場を設け、意見交換や学校と地域が相互扶助の体制を確立する。学校から地域へ、地域から学校への動きを活性化することで、子どもたちには学びの基礎基本を習得する新たなツールを得ることができる。

上記の①・②を円滑かつ効果的に実施するためには、まずは各校種の管理職がその趣旨と意義を理解することが肝要である。また、地域と連携した事業展開はより一層その効果を高めるものと考えられるので、地域を含めたトータルコーディネイターが求められる。

4 われわれが明日からすべき初めの一步

教職員の多忙化が問題となる中、校種を超えた連携を推進するためにはコストを極力下げて、より高いパフォーマンスを上げなければならない。そのためには、小・中・高の効果的な連携について綿密な計画を立てたい。違校種連携は全国的に見ると、その取組は一律ではないが、それぞれの立場でまずは今より一步前進させたい。

5 私自身の感想

社会を覆っている表層的な知識や技能、情報は日進月歩で動いており短期間に陳腐化してしまう。しかし、コアな部分は普遍的であり、まさに教育においても「不易と流行」がある。教育者は流行を敏感に感じつつ不易の部分を子どもに身に付けさせることこそが重要である。今まさに教育者が校種を超えて連携し、地域と一体となって子どもを育てる仕組と意識の醸成が求められているように思う。